

造瓦組織編成からみた肥後地域における地方支配展開に関する研究

早川 和賀子

はじめに

本稿の目的は、古代肥後地域における初期寺院の展開、およびその背景にある地方支配の展開について、鞠智城との関係も踏まえ、瓦の検討を通して考察することである。日本列島において、飛鳥寺造営以降、寺院、宮、官衙などの限られた建造物に使用された瓦は、それら建造物の増加とともに、その生産形態を変化させてきた。このような瓦の展開を考古学的に検討することで、それが葺かれた施設の造営過程とその背景の一端を明らかにすることが可能となる。

大宰府が設置された西海道は、他地域とは異なる地方統治形態の存在が想定され、そのような地域での大宰府設置前における地方経営が如何になされたのかを検討することは、その後の西海道における地方経営のあり方を考察する上で必要であると考ええる。本稿で扱う肥後地域は、九州のほぼ中央に位置し、比較的早い時期から、鞠智城や寺院など、瓦が出土するような遺跡がみられる。さらに、後述するが列島内でも稀な瓦の文様や技術の採用が指摘されており、瓦研究においても独自性の強さが強調されてきた。また、対隼人政策にも大きく貢献した地でもあり、地理的にも重要な地である。以上のような問題意識のもと、古代肥後地域における初期寺院の展開について、白村江敗戦後に築城された鞠智城ともあわせて、瓦生産

の視点から検討する。

一．研究の現状と課題

ここでは、古代肥後地域における初期寺院の展開が、鞠智城との関係でどのように理解されてきたかについて、瓦研究の視点から概観し、そこから導き出される課題を提示する。

西海道における古代瓦の様相は、朝鮮半島系、畿内系、大宰府系など多様であり、従来瓦当文様ごとに研究が進められてきた。特に、大宰府整備を契機として七世紀末～八世紀初頭以降みられる大宰府系瓦（小田一九五七a、一九五七b、一九五八b、一九六一a）の出現以前には、朝鮮半島系や畿内系の瓦が主に広がるとされる（小田、一九五八a、一九六一b、一九六一c、一九六六a、一九六六b、一九七五、他）。

このような状況は、古代肥後地域でもみられる。肥後の瓦についても、従来、系譜、年代観、分布について個別に論じられてきた。その一つとして、九州で出土する単弁軒丸瓦に着目した研究があり、鞠智城跡出土軒丸瓦もその中で検討されている（高谷・鶴嶋、一九八〇）。九州式単弁軒丸瓦は、天智四年（六六五）に着工される大野城・基肆城の築城を九州への流入契機として展開すると考えられて

おり（小田、一九六六b、一九七五）、鞠智城跡出土の単弁軒丸瓦については、大野城出土軒丸瓦との類似が指摘されている（高谷・鶴嶋、一九八〇）。

一方で、鞠智城と肥後地域内の初期寺院の瓦における関係については、鞠智城と陳内廃寺との関連性がしばしば指摘されてきた。鞠智城例と蓮弁形態が類似する資料が陳内廃寺で出土しており、鞠智城例を模倣したものと考えられている。また、高谷・鶴嶋は、この陳内廃寺例に伴う重弧文軒平瓦凸面にみられる調整技法（格子叩き後、広幅条痕）が、鞠智城跡出土平瓦の凸面にみられる調整技法と類似することを指摘している。さらに鞠智城例は、陳内廃寺の八世紀初頭の補修瓦とされていた素弁八葉蓮華文軒丸瓦よりやや先行して、鞠智城の史料初見である文武二年（六九八）の修治時のものと考えられた（高谷・鶴嶋一九八〇）。鞠智城例の時期に関しては、鞠智城例との類似瓦が、中国地方の天智期の寺院である備後寺町廃寺、安芸横見廃寺でみられることから、後に、創建期所要瓦に修正されている（鶴嶋一九八一）。

また、これまで個別に検討されてきた肥後地域内の瓦について、鶴嶋が最初に体系的編年を提示した（鶴嶋一九九一）。氏は瓦当文様と製作技法は相関関係にあるものとし、文様と製作技法の変遷から、肥後の瓦を四期（草創期・前期・中期・後期）に区分した。この中で、鞠智城と初期寺院の瓦のうち、大宰府の影響を受ける前の時期にあたるものが草創期の七世紀後半に位置づけられている。さらに、肥後の初期寺院にみられる「瓦当嵌め込み式法」に着目し、この技法が伝播した契機として鞠智城の築城を挙げている。その根拠としては、①初期寺院の一つである陳内廃寺で、鞠智城跡出土軒丸瓦を

祖形とする文様を持つ瓦が出土しており、これが瓦当嵌め込み式法であるため、鞠智城跡出土瓦も瓦当嵌め込み式法の可能性が高いこと、②鞠智城跡出土平瓦凸面にみられる条痕調整と陳内廃寺出土重弧文軒平瓦凸面にみられる条痕調整が類似しており、他で例のない特異な技法であること、の二点を挙げており、二遺跡出土の瓦の製作に従事した造瓦工人が同一集団であった可能性を指摘している（鶴嶋一九九一）。

その後、鶴嶋の編年を受けて、新出資料も含め、金田が体系的編年を提示している（金田一九九七）。そこでは、瓦当文様と製作技法の比較から、鞠智城跡出土単弁八葉軒丸瓦と大野城出土単弁軒丸瓦の近似性を挙げ、大野城例が大野城築城の年代からそれほど離れていない時期と考えられていることから、鞠智城例も七世紀後半のうち中葉に近い時期に位置づけられるものと考え、肥後地域内の初期寺院出土瓦とは段階設定を区分している。ただ、それ以外は、鶴嶋編年とほぼ同様の瓦の年代観が示されている。ここでも鶴嶋同様に、鞠智城と陳内廃寺の関連性が指摘されている。具体的には、①蓮弁形態に着目し、鞠智城軒丸瓦↓陳内廃寺出土軒丸瓦（陳内I b式）↓陳内廃寺出土軒丸瓦（陳内I a式）・渡鹿A遺跡出土軒丸瓦（渡鹿I式）という文様変遷をたどる、②技術的変遷については鞠智城から陳内廃寺へ連続的に捉えられないが、陳内廃寺で製作技法上瓦当の剥落を防ぐ機能が上昇した新たな製作技法として嵌め込み式技法の導入がみられることから、①の文様変遷の方向を妥当なものと考え、③鞠智城出土平瓦と陳内廃寺出土軒平瓦の凸面調整が類似する、の三点が挙げられている（金田一九九七）。さらに、鞠智城の瓦と大野城や基肆城などの朝鮮式山城出土瓦との間の共通点が挙げら

れ、鞠智城跡出土軒丸瓦は、肥後の古代造瓦の展開の中ではイレギュラー的存在として位置づけられている（金田一九九七）。

その後、新出資料も含めて鞠智城跡出土瓦の詳細な検討を行った西住が、鞠智城例の製作技法の特殊性を指摘している（西住一九九九）。中山は、この製作技法を「丸瓦被せ式技法」と称し、肥後地域内の初期寺院の瓦でみられる瓦当嵌め込み式法とは異なるものとして捉えた（中山二〇〇五）。

以上鞠智城と初期寺院の瓦における関連性に着目して研究史を概観してきた。鞠智城跡出土瓦は、築城期のものとして考える見方が強い。初期寺院との関係では、陳内廃寺出土の単弁軒丸瓦との文様の近似が指摘されているが、やはり鞠智城と初期寺院出土の軒丸瓦の間では、「丸瓦被せ式技法」と「瓦当嵌め込み式法」という技法上の差異が指摘されている。但し、現状では、瓦からみた鞠智城と初期寺院との関係は、①鞠智城例と陳内廃寺例の近似、②丸瓦被せ式技法と瓦当嵌め込み式技法の二項対立、について述べられているに留まる。そこで本稿では、各初期寺院において、初期軒丸瓦の瓦当文様と製作技法の選択が如何になされたのかを検討し、瓦における鞠智城と初期寺院の関係・初期寺院間の関係を詳細に導き出すことで、各初期寺院の造営背景まで踏み込んだ考察が可能となると考える。

二．方法と資料

以上の研究史と課題を受けて、本稿では、瓦の検討を通して、古代肥後地域における初期寺院の展開について考察することを目的とする。その際、特に鞠智城と初期寺院の関係に着目し、具体的には

瓦の瓦当文様と製作技法を検討する。

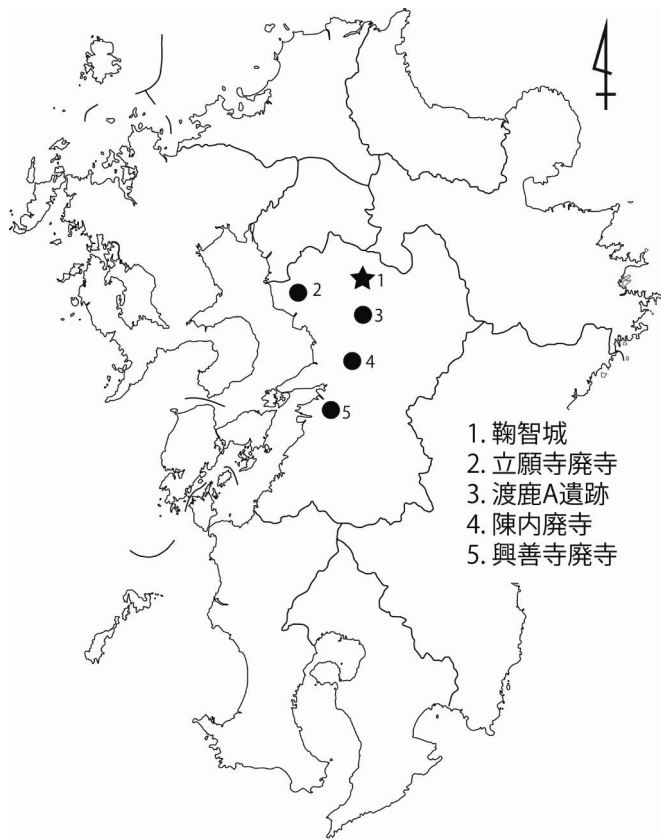
（一）分析方法

第一章でも述べたように、肥後地域内の瓦の展開の様相を明らかにするうえで、これまで鞠智城跡出土瓦と初期寺院出土瓦との関係について検討されてきた。ここでは、先行研究の成果をさらに進めるために、従来主に検討されてきた軒丸瓦を対象とする。まず各対象遺跡出土の軒丸瓦のうち、初期にあたる瓦を抽出し、次に瓦当文様と製作技法をそれぞれ検討することで、各瓦の生成過程を復元する。先行研究より、瓦当文様の動態と製作技法の動態に連動性が見られない可能性が部分的に示されているため、それぞれを個別に検討する。製作技法については、各製作工程で抽出される属性に着目し、各属性のバリエーションを抽出する。さらに、各属性のバリエーションの組み合わせを文様ごとに提示する。具体的な観察項目は、成形技法と調整技法に関するもので、分析の章で後述する。

（二）対象資料

対象遺跡は、肥後地域内でも瓦の出土が七世紀後半の比較的早くからみられる鞠智城、陳内廃寺、渡鹿A遺跡（二）、立願寺廃寺、興善寺廃寺を扱う（第1図）。具体的に扱う資料については以下の通りである。

肥後の古瓦に関する研究は、先述のように、瓦当文様や製作技法、年代観、影響関係など多く指摘されている。ここでは、先行研究で提示されている年代観を概観し、本稿で具体的に分析する資料を抽出する。各瓦について先行研究で指摘されている内容については、



第1図 対象遺跡分布図

分析の項目で触れる。

先述したが、個別に検討されてきた古代肥後地域の瓦について、最初に体系的編年を提示したのは、鶴嶋である。氏の編年では、四期区分がなされており、①肥後独自の瓦生産体制（七世紀後半：草創期）、②大宰府の影響の流入（七世紀末から八世紀初頭）、③国分寺創建（七世紀前半：前期）、④肥後国分寺様式の成立と展開（国分寺創建後、九世紀中葉：中期）、⑤瓦生産の官による統制（九世紀中葉～一〇世紀初頭：後期）、という瓦の様相の変遷が描かれている（鶴嶋一九九二）。

ここで、肥後の古瓦の展開における草創期におかれているのが、鞠智城、陳内廃寺、渡鹿A遺跡、立願寺廃寺、興善寺廃寺出土の初期の瓦である。

その後、これを受けて新出資料も含め金田が提示した編年では、先述のように鞠智城跡出土軒丸瓦を初期寺院出土瓦とは区分し、他はほぼ同様の瓦の変遷が示されている。ここでは、①鞠智城築城を契機として瓦生産が開始し、②立願寺廃寺・陳内廃寺・興善寺廃寺等が造営され、③七世紀末～八世紀初頭には大宰府系瓦の影響を受けた瓦が出現、④国分寺造営にともない国分寺創建瓦と類似瓦が増加すると理解されている（金田一九九七）。

両者は、鞠智城跡と初期寺院跡出土の瓦の段階設定において異なる見解を示しているが、大宰府系古瓦の影響を受けた資料より、前段階に設定している資料に相違はない。したがって、本稿では、二氏の編年観に依拠し、鞠智城ならびに初期寺院の初期にあたる瓦を対象資料として、具体的に検討を進める（第2図）（二）。

三、分析

以下、各瓦の瓦当文様と製作技法について個別に検討していく。先行研究で具体的に指摘されている内容については、その折に引用を提示する。

（一）瓦当文様

鞠智城

鞠智城跡出土軒丸瓦の文様に関する検討は、第五次調査出土軒丸瓦片の報告にてみられる。「弁が肉厚で稜線が通り、弁先が強く反転する」という特徴は、「百濟末期様式」としながらも、天智天皇四年（六四五）に着工される大野城・基肄城の築城を契機として流入される九州式単弁瓦とは、系譜が異なるとしている。また、大野城でも九

州式単弁瓦とは異なる七世紀後半代の軒丸瓦が出土しており、蓮弁の平面形や稜線が基部から弁先まで通る点で、鞠智城例はこの大野城例に類似すると指摘されている。一方、陳内廃寺出土の三類Cと分類されている素弁八葉蓮華文軒丸瓦と鞠智城例との、蓮弁形態の類似も指摘されている。但し、陳内廃寺例は弁が細身となり整齊性に欠けるので、鞠智城例より後出するものと考えられている（高谷・



第2図 対象資料（縮尺不同）

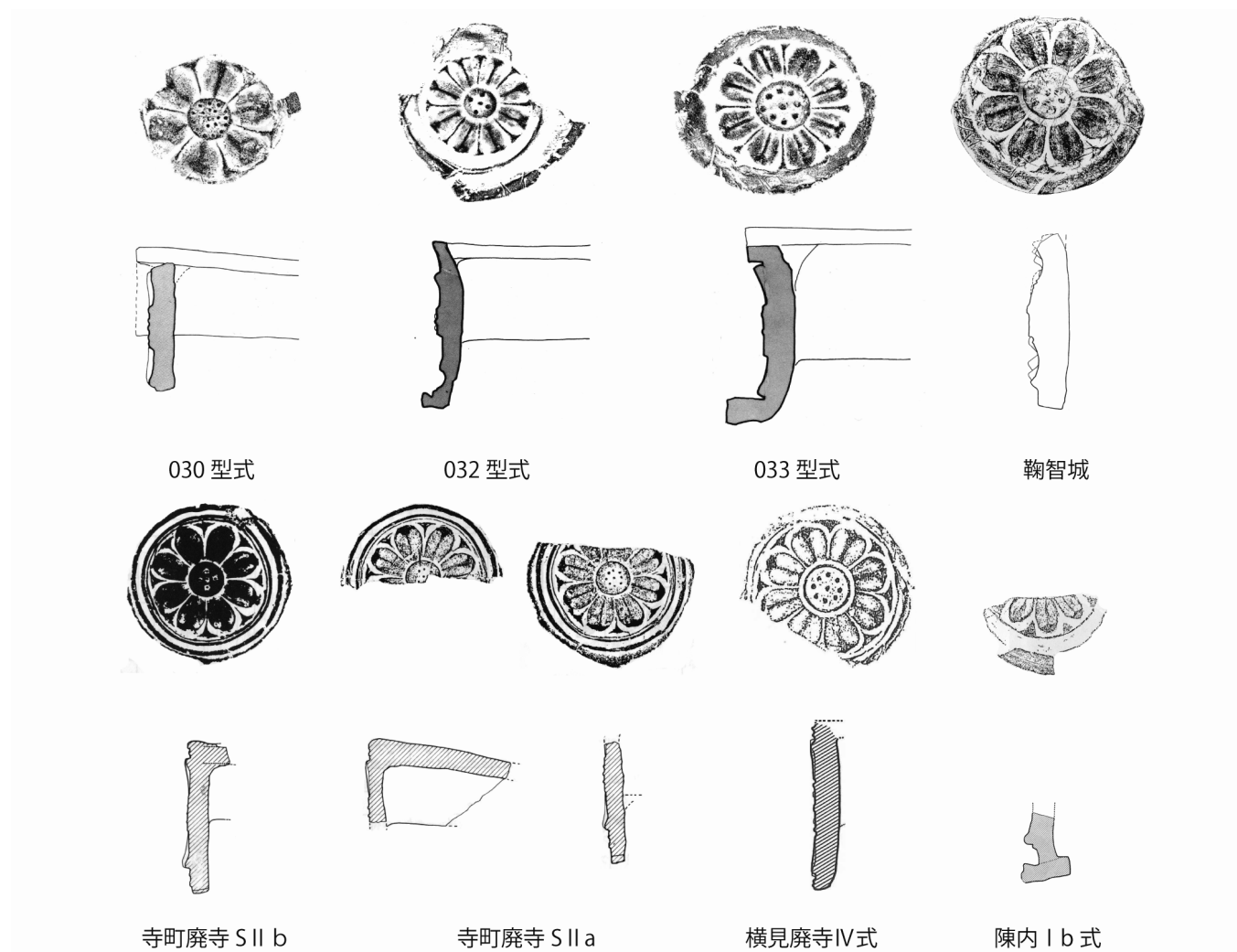
鶴嶋一九八〇）。また、第五次調査出土軒丸瓦の系譜について、飛鳥地方、特に豊浦寺の高句麗系軒丸瓦に系統を求める見解もある（小田一九九〇、二〇一二）。肥後地域の古瓦の編年を提示した金田は、それまで指摘されている鞠智城例と陳内廃寺例の類似を追認し、かつ大野城で出土した単弁八葉蓮華文軒丸瓦（〇三三型式）との詳細な検討から、瓦当文様の近似を指摘している（金田一九九七）。その後、新出資料を加えて鞠智城例の詳細な検討がなされており、横見廃寺、寺町廃寺等の山陽地方寺院や大野城〇三三型式との瓦当文様の類似が示唆されている（中山二〇〇五）。

以上のように、鞠智城出土軒丸瓦の瓦当文様については、その系譜に諸説あり、類似例も諸例挙げられている。本稿の目的は、鞠智城と初期寺院の関係を検討することであるため、鞠智城例の系譜についての十分な検討には至らないが、先行研究で指摘されている瓦当文様類似事例について、断面形態に着目したい（第3図）。

まず、鞠智城例（第3図）についてだが、断面形態の特徴として、突出した中房、中房と弁区間の凹線、中房から一段低く匙面状となり弁端で盛り上がる蓮弁、弁区の外の無文平坦面が挙げられる。

ここで比較として、鞠智城例より後出するものの、鞠智城例との近似が指摘されている陳内廃寺例（Ib式、第3図）の断面形態を検討する。陳内Ib式は、弁区と周縁の一部のみの残存状況だが、蓮弁は匙面状で弁端は盛り上がり、弁区の外に無文平坦面があり、直立する周縁がみられる。直立する周縁は、後述する成形技法の相違によるものと判断されるが、それ以外は近似している。

また、先行研究で指摘されている大野城の〇三三型式（第3図）



第3図 断面形態（縮尺不同）

は、一段高い中房と、匙面状で弁端が盛り上がる蓮弁形態をもつ。しかし、鞠智城例のような中房と弁区間の凹圈線や、弁区外の無文平坦面はみられない。むしろ、〇三三型式と同じ大宰府史跡出土の〇三二型式（栗原一九九八）で、このような無文平坦面が確認される。

次に、山陽地方寺院例（第3図）についてみていく。鞠智城例と文様の類似が指摘されている横見廃寺第IV類は、中山の指摘のように、蓮弁が匙面状になり、弁端は盛り上がり、蓮弁と中房間に凹圈線がみられる点が鞠智城例と類似する。この蓮弁と中房間にめぐる凹圈線という特徴は、古新羅の瓦の文様によくみられると指摘されている（亀田二〇〇六）ことを付け加えておく。

但し、横見廃寺IV類は、周縁が二重圈あるいは三重圈となり、中房が一段低く（中山二〇〇五）、全体的に平坦な印象が強い。このような印象は、寺町廃寺出土軒丸瓦でも同様である。匙面状で弁端が盛り上がる蓮弁は類似するのだが、周縁は二重圈で（中山二〇〇五）、中房が一段低く平坦な印象である。

以上、鞠智城出土瓦との文様の類似が指摘されている資料について、断面形態をみてきたが、平面形態同様に、鞠智城例と合致するものは認められない。ただし、蓮弁の断面形態や蓮弁より中房が一段突出する点で、大野城出土例が近似するといえる。しかし、通例指摘されている〇三三型式だけではなく、〇三二型式にみられる要素も合わせもち、大宰府編年第一段階に位置づけられる諸瓦と、文様決定・瓦範製作のうえで関連があった可能性が窺える。

陳内麿寺

陳内I b式(第2図)は、鞠智城の項でも述べた通り、鞠智城跡出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦と、文様の近似が指摘されてきた(高谷・鶴嶋一九八〇、鶴嶋一九九一、金田一九九七)。類似点として、瓦当文様の蓮弁形態が主に挙げられており、弁区と周縁の間の無文部がみられる点も共通点として指摘されている(金田一九九七)。

実見の結果、平面形態ならびに断面形態も非常に類似性が高いことが確認された。断面形態については、鞠智城の項で検討した通りである。但し、弁区と周縁の間の無文部については、鞠智城例では瓦範によって作り出されたものであるが、陳内I b式では、無文部に沿ったナデ跡がみられる。これは、後述する瓦当嵌め込み式技法による製作のため、瓦当と丸瓦の接着を高めるためのものと推定される。

陳内I a式(第2図)は、渡鹿A遺跡出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦(渡鹿I式)との類似性が高く、それとともに論じられることが多いため、次の渡鹿A遺跡の項であわせて検討する。

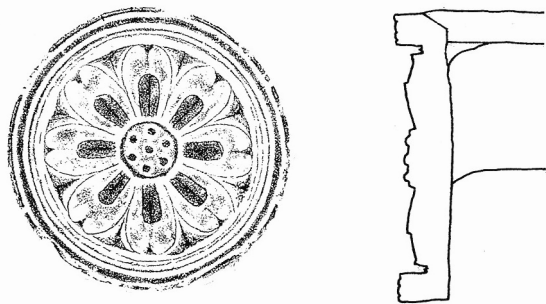
渡鹿A遺跡

渡鹿I式(第2図)は、陳内I a式と瓦当文様が類似し、同文異

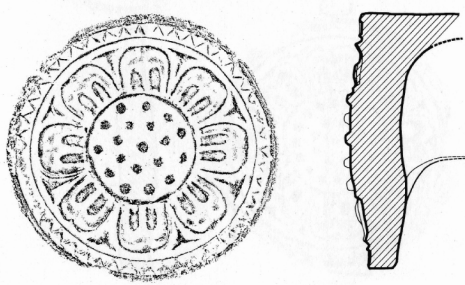
範と考えられている。また、実見がかなっていないが、陳内麿寺にて、渡鹿A遺跡と同範の軒丸瓦が確認されており(金田一九九七)、二遺跡間の関連性が窺える。この文様の系譜に関しては、重圏文縁であること、蓮弁に子葉はないが縞を隆起線として残していることを根拠として、山田寺系瓦当文の変異型の可能性が指摘されている(小田一九六一b)。また、陳内I a式・渡鹿I式については、鞠智城例を祖形とし、鞠智城例↓陳内I b式↓陳内I a式・渡鹿I式と変化したとも想定されている(金田一九九七)。

しかし、鞠智城例・陳内I b式と、陳内I a式・渡鹿I式との間の文様変遷は、蓮弁形態、中房の突出の程度、周縁の様相において連続的には捉え難い。また、断面形態でも、鞠智城例や陳内I b式の蓮弁の断面形態は振り返るのに対し、陳内I a式・渡鹿I式は逆に膨らむという差異がみられる。よって、陳内I a式・渡鹿I式の瓦当文様の成立過程は、陳内I b式からの変化では説明できないと考えられる。

陳内I a式・渡鹿I式の要素で、単弁八葉蓮華文軒丸瓦、高く直立する周縁、突出した中房、細部では、細い凸線で表現された蓮弁の輪郭、弁端で逆三角形をなし、反転する弁央に縞がある点などは、山田寺式(第4図)の瓦当文様の要素(佐川・西川二〇〇五)と類似する。しかし、



第4図 山田寺式軒丸瓦例



第5図 法隆寺式軒丸瓦例

A型は、単弁素弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、山田寺式軒丸瓦や先に挙げた九州出土の山田寺系軒丸瓦とは、連続的には捉え難い。現段階では、直接の系譜元にあたると思われる資料の特定には至っておらず、この資料の文様系譜についても今後の課題としたい。B型は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、その文様意匠は、蓮子の数や周縁の線鋸齒文の数など部分的差異はあるが、法隆寺式軒丸瓦（第5図）に非常に近似している。先行研究の指摘通り、法隆寺式に系

内区と周縁の間の細い圏線がなく、蓮弁には山田寺式のような子葉はもたず中央に稜線をもつなど、差異もみられ、山田寺式との文様の隔たりは大きい。九州でみられる山田寺系の瓦当文様は限られており、筑後の上岩田遺跡出土の垂木先瓦がその典型であるが、その他、筑前の上白水遺跡・ウトグチ瓦窯跡、塔原廃寺でも認められている（小田一九六一b）。陳内Ia式・渡鹿I式は、このような山田寺系の文様を採用している瓦とも連続性が認めがたい。陳内Ia式・渡鹿I式の文様系譜については、今後の課題としたい。

立願寺廃寺

山田寺系の瓦当文様と指摘されている軒丸瓦A型（第2図）と、

法隆寺系の瓦当文様と指摘されている軒丸瓦B型（第2図）がある（坂田編一九九四）。

譜がたどりうると考えられよう。

興善寺廃寺

興善寺Ia式（第2図）は、鬼面文と報告されているが、非常に簡略化された文様表現であり、現在のところ、直接的系譜を考えられる資料は特定されていない。同じ肥後地域内でも立願寺廃寺で「鬼面文」軒丸瓦は出土しているが、立願寺例は編年上八世紀後半に位置づけられており、文様意匠も興善寺Ia式とは隔たりが大きい。

朝鮮半島では、新羅の皇龍寺で類似した鬼面文軒丸瓦（第6図）がみられる。当資料は、総出土量が約百八十点に及び、廃棄遺構にまでまとまって出土している。また、文献上で八世紀半ばに建てられたと考えられている第三期伽藍の鐘樓の基壇内からも若干出土しており（文化財管理局一九八四）、この年代に従うと、この瓦が皇龍寺にて使用されたのはこれ以前と考えられる。皇龍寺例の明確な年代が不明であり、興善寺Ia式が肥後地域内の他初期寺院出土瓦との製作技法の同一から、七世紀後半～八世紀初頭に位置づけられていることを考えると、両資料の年代観が今後の課題となる。文様意匠を比較すると、全体的に平面的で、全体の文様構成、簡略な眼の表現、髭の配置等は同一である。しかし、舌の有無、眉・額の表現等、差異もみられ、興善寺例のほうが整齐性に欠け、簡略化されている。

興善寺Ib式（第2図）は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。先行研究では、



第6図 皇龍寺鬼面文軒丸瓦

陳内I a式と類似しつつも、弁の形態など写実性が失われていることから、後出する要素が多いとされている。また、興善寺廃寺で鬼面文軒丸瓦が出土することからも、独自性の強さが想定され、その独自性が文様に反映されている可能性も指摘されている（金田一九九七）。全体的にも平板になり非常に簡略化されているが、陳内廃寺や渡鹿A遺跡で出土している単弁八葉蓮華文軒丸瓦にみられるような、中房における十字の凸線が興善寺I b式でもみられる。先行研究で指摘されているように、陳内I a式・渡鹿I式の後出形態の可能性が考えられよう。

（二）製作技法

肥後の古瓦の製作技法に関しては、これまでも検討されている（村田・甲元一九八〇、野田編一九八〇、鶴嶋一九九一、坂田編一九九四、西住一九九九、金田一九九七、中山二〇〇五）。ここでは、先行研究に依拠する部分が多いが、瓦の製作工程ごとに抽出される属性に着目し、製作技法について検討を行う。具体的には、従来主に着目されてきた成形技法に加え、調整技法もあわせて検討し、資料間比較を行う。成形技法については、瓦当製作方法や丸瓦先端加工の有無など、成形に関わる痕跡が観察された場合には、その都度明示する。

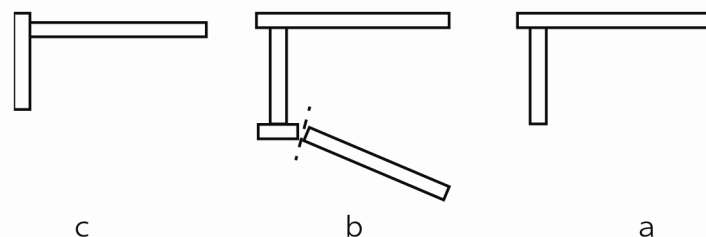
成形技法

今回改めて資料を観察した結果、先行研究で指摘されている丸瓦被せ式技法、瓦当嵌め込み式技法に、接合式技法も加えた、以下の三つの成形技法がみられた（第7図）。

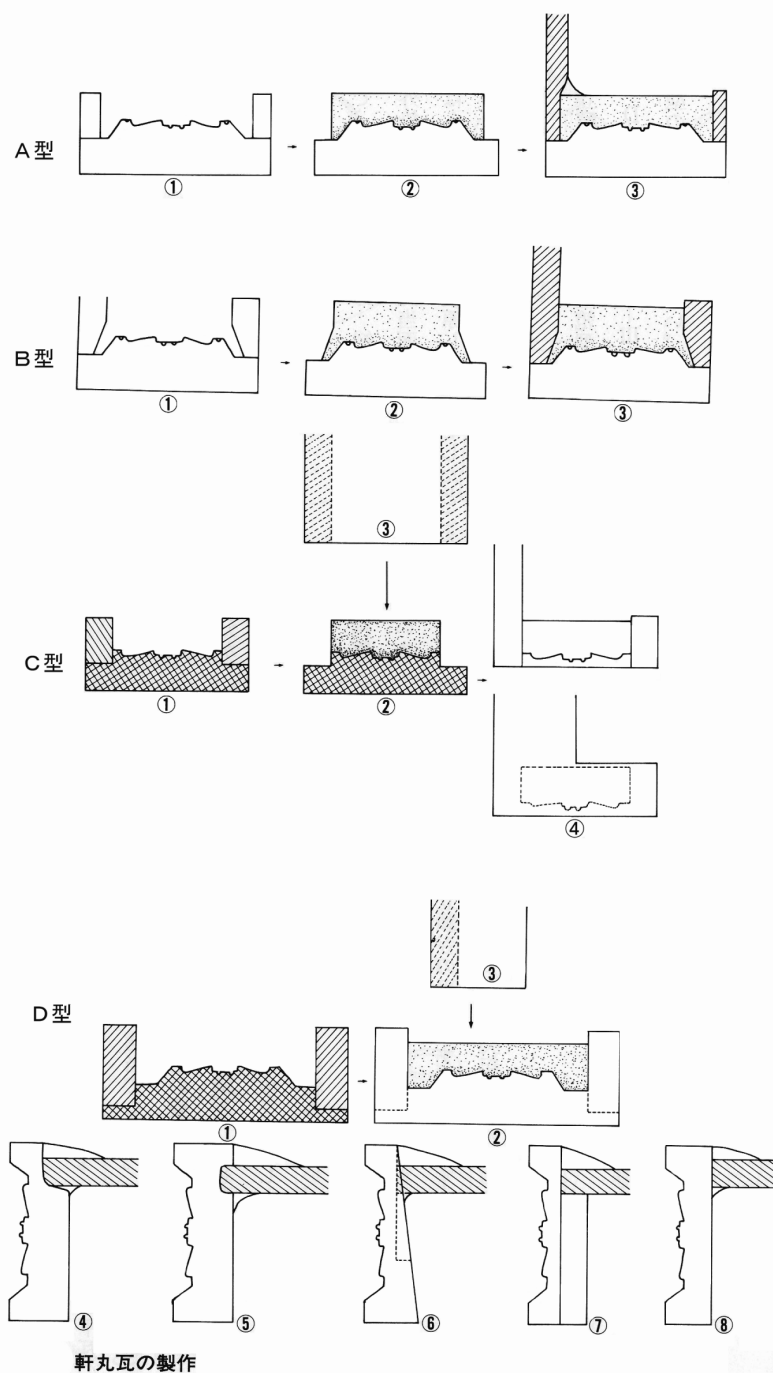
- a 丸瓦被せ式技法
- b 瓦当嵌め込み式技法
- c 接合式技法

aは、西住により指摘され（西住一九九九）、中山により「丸瓦被せ式技法」と称されている（中山二〇〇五）。半裁した丸瓦を瓦当の上半側面に被せる技法で、鞠智城例にみられる。鞠智城例では、接合する「丸瓦凹面の広端から一、二cmのところへラ状の道具で、横方向に数条の沈線を三cm程度の幅に亘って刻」んでいる（中山二〇〇五）。この遺跡出土軒丸瓦のうち、成形技法のわかる全ての資料がこれに該当する（中山二〇〇五）。この状況は、実見の結果追認できた。

一方、bは、興善寺廃寺出土土瓦の製作技法の復元の際に、提示されている（野田編一九八〇）^{（三）}。製作した瓦当に円筒の丸瓦を嵌め込み、接合した後に丸瓦の不要部分を切り取る方法である。陳内廃寺（I a式、I b式）、渡鹿A遺跡（I式）、立願寺廃寺（A型、B型）、興善寺廃寺の鬼面文軒丸瓦（I a式）の資料がこれにあたる。瓦当文様が鞠智城例に類似する陳内I b式は、一部のみの遺存だが、丸瓦の先端は未調整であることが明確である。瓦当の粘土は数



第7図 軒丸瓦成形技法パターン



第8図 立願寺廃寺軒丸瓦の製作技法（坂田編、1994より引用）

回に分けて付加されており、粘土塊の境が明瞭に残る。

陳内I a式と渡鹿I式は、瓦当と丸瓦の接合部分が完形、あるいは丸瓦部分が剥離しており、丸瓦先端の加工については不明である。瓦当は数回に分けて付加した粘土が押し固められており、粘土の境も不明瞭である。

立願寺廃寺例については、報告書の中で立願寺廃寺出土瓦の製作

技法の復元が試みられた際に、瓦範と外枠のセットパターンや丸瓦先端の加工について検討されている（坂田編一九九四、第8図）。坂田の指摘するように、立願寺廃寺例の瓦当は均一な厚さで製作されているため外枠の使用があった可能性があるが、明瞭な外枠痕跡は見受けられない。立願寺A型は、坂田により製作技法「A型」（第8図―A型）とされている。「A型」は、丸瓦の先端が周縁の外側部分

を形成する作り方である。実見の結果、挿入丸瓦部分は・離していたが、周縁の内側部分が瓦当面から続く粘土で製作されていることを確認できた。瓦当は、瓦当の厚さ分の粘土が数回に分けて付加され押し固められ、側面は同心円印文で叩き締められており、粘土の境は明瞭ではない。坂田によると、挿入丸瓦の内側部分を少し削って瓦当部に嵌め込む（第8図―A型―③）とあるが、実見したところその痕跡は確認できなかった。

立願寺B型は、坂田によると製作技法「C型」（第8図―C型）とされている。「C型」は瓦当を製作して、先端未調整の円筒丸瓦を挿入する方法だが、実見の結果、丸瓦の凹面側を横ケズリしたものを挿入している例もみられた^{（四）}。瓦当の粘土は数回に分けて付加され押し固められており、粘土の境は不明瞭である。但し、瓦当裏面側の粘土一枚分のみ粘土境が非常に明瞭に残っており、この一枚分については粘土付加のタイミングが異なることが想定される。おそらく瓦当を製作し、円筒丸瓦を嵌め込んだ後に、瓦当と丸瓦の接合を高めることも意図して、さらに粘土を付加したものと考えられる。

興善寺I a式は、陳内I a式・渡鹿I式同様に、瓦当と丸瓦の接合部分が完形、あるいは丸瓦部分が剥離しているため、丸瓦先端の加工については不明である。瓦当は、同じ厚さの粘土を二枚重ねて製作されており、粘土境が非常に明瞭に残る。裏面側の粘土一枚分は、円筒丸瓦挿入後に付加した可能性がある。瓦当文様の節で、文様の類似を指摘した皇龍寺例は、実見し得ていないが、写真を見る限り瓦当嵌め込み式技法である。また、瓦当製作において、同一の厚さの粘土を二枚重ねる方法が採られており、この点でも、皇龍寺例は興善寺廃寺と類似する。

成形技法cは、瓦当と半裁された丸瓦を接合する方法である。肥後を含め、他地域でも軒丸瓦の成形技法として一般的な方法である。興善寺I b式がこれに該当する。従来この資料は丸瓦嵌め込み式技法とされていたが、今回の検討の結果、接合式技法であることが認められる。

調整技法

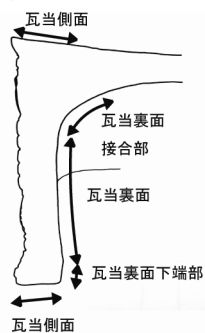
観察項目として、瓦当側面、瓦当裏面接合部、裏面調整に着目する（第9図）。各資料の調整技法は、成形技法が三パターンにまとめられたのに比して、文様ごとにバリエーションが認められた。以下、資料ごとに調整技法についてみていく。

鞠智城

鞠智城例は、丸瓦被せ式技法であり、瓦当側面の上半は丸瓦凸面にあたる。多くの資料は瓦当と丸瓦が剥離した状態であり、軒丸瓦に使用された丸瓦の凸面は縦や横方向にケズリが施されている。瓦当裏面接合部は、一部の資料で瓦当と丸瓦の接合ラインに沿った横ナデがみられた。瓦当裏面は、横ナデが認められる。

陳内廃寺

陳内I b式は一部のみの遺存であるが、瓦当側面には横ナデがみられる。瓦当裏面接合部は、欠損のため不明である。瓦当裏面には、円形の道具痕が残る。これは、瓦当裏面に粘土付加する際に、断面円形の棒状工具で突き固めた痕跡と考えられる。



第9図 軒丸瓦調整部位名称

一方、陳内I a式は、全体的に表面が摩滅しているが、瓦当側面にあたる円筒丸瓦凸面に微かに平行文叩き痕が認められる。瓦当裏面接合部は、瓦当と丸瓦の接合ラインに沿った横ナデである。瓦当裏面は斜めにナデが施されているが、一部刺突したような痕跡が認められる。これは、鶴嶋が指摘するように（鶴嶋一九九二）、瓦当裏面に粘土を付加した際に棒状工具で刺突したものと思われ、その上からナデを施したと想定される。

渡鹿A遺跡

渡鹿I式は、瓦当側面にあたる円筒丸瓦が剥離しており、観察し得た一点では、ハケメのような工具による縦方向の調整痕が側面一周にわたって認められる。また、横方向の縄目痕が微かにみられる。おそらく、瓦当と円筒丸瓦を接合する際に、円筒丸瓦の凸面側から叩いた際の痕跡と思われる。瓦当裏面接合部は、瓦当と丸瓦の接合ラインに沿った横ナデである。瓦当裏面には、工具で刺突した痕跡がみられ、陳内I a式同様、瓦当裏面に粘土を付加する際に、棒状工具でつけた痕跡と考えられる。

立願寺廃寺

A型は、瓦当側面にあたる円筒丸瓦が全て剥離しているため、側面調整、瓦当裏面接合部調整については不明である。瓦当裏面は縦ナデが施されている。

B型では、瓦当側面に平行叩き文が認められる。瓦当裏面の接合部は、瓦当と丸瓦の接合ラインに沿った横ナデで、瓦当と円筒丸瓦の接合時に一周する回転ナデが施されている。瓦当裏面には、不定方向ナデや縦ナデがみられる。

興善寺廃寺

興善寺I a式は、瓦当嵌め込み式技法による円筒丸瓦が剥離している資料がほとんどである。瓦当側面が観察し得た一点では、縦ケズリがみられる。瓦当裏面接合部では、横ナデ調整が施され、瓦当裏面では丸瓦にそったナデ、あるいは斜方向のナデが確認される。

興善寺I b式は、瓦当側面に木板のようなものでナデ調整した痕跡がみられる。主に横方向であるが、剥離した丸瓦の相当位置には縦方向のものも認められる。瓦当裏面接合部は、該当部位が剥離しているため不明であるが、僅かにナデ跡認められ、瓦当裏面にはそのナデ跡に一部消されて格子叩き痕が認められる。裏面下端には広く横方向にケズリ調整が施されている。

(三) 小結

以上、先行研究の成果に依拠する部分が多いが、各軒丸瓦について、瓦当文様と製作技法を検討してきた。瓦当文様は、鞠智城の瓦が大野城例も含む大宰府編年第一段階の瓦との関連で考えられ、また、陳内I b式が鞠智城例と近似することが追認できた。陳内I a式・渡鹿I式、立願寺A型の文様系譜については今後の課題とするが、興善寺I b式は陳内I a式・渡鹿I式の後出形態の可能性がある。立願寺B型が法隆寺式に系譜がたどりうる一方、興善寺I a式は新羅の皇龍寺出土の鬼面文軒丸瓦と類似する可能性がみられた。文様ごとの、成形技法と調整技法の検討結果をまとめたものが第1表である。同じ瓦当文様の資料の製作技法はおおよそ同一であった。丸瓦被せ式技法（a）の鞠智城例と接合式技法（c）の興善寺I b式の製作技法は、それぞれ特徴がみられ、瓦当嵌め込み式技法

第1表 型式別製作技法(「―」は欠損、あるいは磨滅のため不明)

渡鹿A遺跡 I式	陳内廃寺		鞠智城	
	Ib	Ia		
b	b	b	a	成形技法
押し固め	粘土塊重ね	押し固め	―	瓦当製作
―	未調整	―	凹面に刻み	丸瓦先端
横縄目+縦ハケ?ナデ	横ナデ	平行文(斜)	(剥離丸瓦に)縦・横ケズリ	瓦当側面
横ナデ	―	横ナデ	横ナデ	瓦当裏面接合部
刺突痕+ナデ	円形道具痕	刺突痕+斜ナデ	横ナデ	瓦当裏面

興善寺廃寺		立願寺廃寺		
Ib	Ia	B型	A型	
c	b	b	b	成形技法
押し固め	粘土2枚	押し固め+一枚	押し固め	瓦当製作
―	―	凹面横ケズリ、未調整	未調整	丸瓦先端
木板?ナデ	縦ケズリ	平行文(縦)	(剥離丸瓦に)平行文(縦)	瓦当側面
―	横ナデ	横ナデ	―	瓦当裏面接合部
格子叩き痕 (下端)横ケズリ	ナデ	回転ナデ 不定方向・縦ナデ	縦ナデ	瓦当裏面

二型式は、瓦当文様と製作技法の類似が比例する例である。立願寺例も、瓦当製作や瓦当側面に叩き痕を残す点では、陳内Ia式・渡鹿I式と類似する。一方、道具は異なるが、瓦当に粘土を付加する際に瓦当裏面を刺突する点では、陳内Ib式も陳内Ia式・渡鹿I

(b)を採用する他資料とは類似しない。また、瓦当嵌め込み式技法(b)の資料の中でも、多様な様相がみられる(五)。陳内Ia式と渡鹿I式に関しては、製作技法の類似度が非常に高い。瓦当側面にみられる叩き痕の種類に差があれど、その他の要素は共通した内容を示す。さらに、瓦当嵌め込み式技法を採用する他の資料が、円筒丸瓦半裁時に瓦当裏面に凸帯を残すのに対し、この二型式は凸帯を残さない。この点も、この二型式の類似度の高さを示す。よってこの

式と類似するといえる。

興善寺Ia式は、瓦当嵌め込み式技法であるが、他の瓦当嵌め込み式技法を採る諸事例とは、瓦当製作法・調整技法において差異がみられる。むしろ、瓦当製作方法に関しては、瓦当嵌め込み式技法とあわせて、皇龍寺の鬼面文軒丸瓦の例に近い。

四. 考察

(一) 古代肥後地域における初期瓦の生成過程

以上の分析を踏まえて、古代肥後地域における初期瓦の生成過程について考察する。まず、鞠智城跡出土瓦については、瓦当文様の平面形態・断面形態より、大野城例(〇三三型式)を含む大宰府編年第一段階の資料との関連で考えられる。その系統に関しては、豊浦寺等の高句麗系軒丸瓦や(小田一九九〇、二〇一二)、百済、あるいは新羅に求める可能性が指摘されているが(中山二〇〇五)、直接的影響や二次的影響など複数の影響関係が想定され、別に分析を要する課題である。一方、製作技法は、一貫して丸瓦被せ式技法が採用されており、肥後地域の他事例とは連続性が見いだせない。丸瓦被せ式技法は、大野城を含む大宰府史跡や、横見廃寺・明官地廃寺などの七世紀後半の山陽地方寺院で確認されることが指摘されている(妹尾二〇〇五a、二〇〇五b、中山二〇〇五)。また、当時の朝鮮半島でも同様の製作技法がみられ、百済や(薛一九七八、亀田一九八一、二〇〇〇)、新羅でも確認されることが指摘されている(中山二〇〇五)。本稿では、鞠智城例の製作技法の直接的系譜について、具体的な分析ができていないため、これについては今後の課題とし

たい。ただ、金田が、鞠智城の瓦について「肥後の古代造瓦の展開の中でイレギュラー的存在」と示唆している点については（金田二〇〇五）、本分析においても追認し得たといえる。

次に、その他の遺跡例の生成過程について考察する。ここで、各遺跡で広く採用される瓦当嵌め込み式技法について検討する。瓦当嵌め込み式技法は、丸瓦被せ式技法同様に、列島内ではそれほど一般的にみられるものではない。九州外では、広島県鎌山遺跡、長野県明科廃寺、埼玉県馬騎の内廃寺、福島県越浜廃寺などで限定的に確認されている（鈴木一九九〇）。九州では、筑後の上岩田遺跡出土の高句麗百済系とされる瓦で、類似技法が採用されており、土管状の丸瓦部が取り付けられ、後に下半の不要部分が切り取られている。丸瓦部先端は片柄型に加工され、瓦当裏面は片柄型加工の丸瓦を接合するために、斜めに削り込まれている。また、接合部は回転ナデによる調整が行われている（宮田二〇〇五）。本稿では、資料の遺存状況を要因として、丸瓦先端や瓦当裏面への加工の有無についてのまとまった検討ができていないが、立願寺B型では、丸瓦の凹面側に横ケズリを行うような加工がみられており、一部の資料では接合部に施された回転ナデが明確に認められる。上岩田遺跡例と立願寺B型では、瓦当文様や丸瓦製作技法等が異なり、上岩田遺跡例でみられる竹状模骨痕が立願寺例ではみられないなどの差異はある。しかし、稀な成形技法であることと、丸瓦先端加工の存在や裏面接合部調整技法の類似より、二遺跡間での技法上の関連性は認めうるのではない。ちなみに、山田寺式軒丸瓦の製作技法変遷を明らかにした研究では、片柄型→楔型への時期的変遷が明らかにされている（佐川二〇〇二）。このような変遷の方向も加味すると、山田寺系の

垂木先瓦が出土している上岩田遺跡からの製作技法上の影響があった可能性は否定できない。但し、この上岩田遺跡の高句麗百済系軒丸瓦については、朝鮮半島からの直接的影響の可能性が示唆されており（小澤編二〇〇五）、畿内における変遷が適用しえない可能性もある。また、亀田は上岩田遺跡例の瓦当嵌め込み式技法を検討する中で、新羅の月城塚字遺跡出土の古新羅瓦例を挙げている（亀田二〇〇六）。以上を踏まえると、半島由来の瓦当嵌め込み式技法が、上岩田遺跡を経由して立願寺廃寺へ導入された可能性が考えられるのではない。

では、他の瓦当嵌め込み式技法を採用する事例はどのように考えられるか。陳内I a式や渡鹿I式が立願寺例と技法上の類似を持つことは先述した。また、陳内I a式・渡鹿I式は、陳内I b式とも技法上類似する。以上より、これらの間では技術上の交流が存在した可能性が考えられ、その中でも陳内I a式と渡鹿I式は瓦当文様・製作技法ともに類似性が非常に高いことから、製作者集団が同一であった可能性が指摘できる。そして、この瓦当嵌め込み式技法の肥後地域における展開の契機となったのが、立願寺廃寺への技術導入であった可能性が窺える。瓦生産の地方展開における七世紀後半の様相として、地域ごとに拠点窯が作られることが指摘されており（梶原一九九九）、また巡回的な工人の派遣形態の様相も指摘されている（菱田一九八六、網一九九七、北村二〇〇四a、二〇〇四b）。本稿における分析結果は、このような他地域の様相とも矛盾しないものと捉えうる。但し、陳内I b式と立願寺廃寺例間では、成形技法bであること以外の技法上の共通性がみられないこと、陳内I b式の作りが整齊性に欠けること、鞠智城築城期所用とされる鞠智城

例と近似する瓦当文様を採用していること等を考慮すると、陳内 I b 式の瓦当嵌め込み式技法は立願寺廃寺から展開したものとは別経路からの導入の可能性も考えられる。

このような瓦当嵌め込み式技法の展開の流れとは、異なる様相が想定されるのが、興善寺 I a 式の鬼面文軒丸瓦である。第三章三節で述べたように、瓦当文様・製作技法ともに、肥後地域内の他の瓦当嵌め込み式技法採用瓦とは類似がみられない。また、皇龍寺出土瓦に、興善寺 I a 式との類似文様・技法がみられることから、立願寺廃寺とは異なる経路により、朝鮮半島由来の造瓦情報が導入された可能性が指摘できよう(八)。

肥後における当該時期の瓦は、成形技法の同一性を特徴として、従来の編年でも一時期のみに肥後地域内で広く盛行するものとして、捉えられてきた(鶴嶋一九九一、金田一九九七)。しかし、同じ成形技法の展開の中にも、多様な技術移転の形が存在した可能性が指摘できる。また、瓦当文様の生成過程も多様であり、多くの場合、技法の類似関係と連動することなく、その生成過程において外部から新たに選択・決定され、創案されているとみられる。

(二) 瓦からみる肥後地域初期寺院造営の背景

では、以上のように復元された各瓦の生成過程の背景にはどのような動きが考えられるだろうか。

各瓦は肥後地域内、あるいは一遺跡内で連綿と系譜が続く瓦当文様を採用しているのではなく、各生成過程においてその都度新たに外から文様情報を採用している。例えば、法隆寺系軒丸瓦の影響を受けている立願寺 B 型も、文様の系譜と連動することなく、他遺跡

出土瓦と同様の瓦当嵌め込み式技法を採用しており、瓦当文様の決定においては指向性が働いていたことが読み取れる。

このような文様選択が働いていた一方で、実際の瓦製作にあたっては瓦当嵌め込み式技法が広く採用されたのである。前節において、立願寺廃寺例と上岩田遺跡例の製作技法上の関連の可能性を述べた。上岩田遺跡例は、先述の通り、高句麗百済系とされ、製作技法とともに朝鮮半島からの影響が示唆されている(小沢編二〇〇五)。上岩田遺跡は、七・九世紀前半を中心とする住居址や掘立柱建物跡が密集し、墨書や刻書土器などの官的性格を示しうる遺物や、朝鮮半島に類例が求められる L 字型カマドをもつ住居、鉄器関連遺物、基壇上礎石建物、などの様相からみても、特殊な様相がみてとれる遺跡であり、官衙的性格をもつ可能性が想定されているところである(柏原・山崎編二〇一一、他)。このような遺跡出土の瓦と立願寺廃寺出土瓦との関連を考えると、立願寺廃寺の瓦生産におけるなんらかの「官」的関与が想定される。また、立願寺廃寺例が使用された時期は立願寺廃寺の I 期(七世紀末～八世紀初頭)であるとされ、このときの建物配置については、金堂だけの一堂宇が建っていたことが想定されている(坂田編一九九四)。一方、上岩田遺跡の基壇状建物も一堂寺院であった可能性が指摘されており、基壇建物の平面プランの点でも二遺跡間で類似がみられる。以上より、立願寺廃寺の造寺に際しては、上岩田遺跡からの技術移転が行われたことが推測される。これは、立願寺廃寺の初期設定が重要視されたことを示すのではないだろうか。立願寺廃寺の周辺に郡家跡や倉院などが造られる(坂田編一九九四)ことも、この事象は矛盾しないものと思われる。肥後地域において、初期の拠点となる寺院の建築は、既に技

術を持つ他地域からの技術移転により実現されたと想定でき、このようなプロセスは他の地域でみられる瓦生産の展開の様相と類似するといえよう。

以上みてきたように、肥後地域における瓦の展開過程は、その開始の契機を鞠智城築城としながらも、造寺の都度、瓦当文様を選択・創案し、瓦当嵌め込み式技法という新たな製作技法を導入することで展開してきたと考えられる。白村江の敗戦以後、他の山城同様に築城された鞠智城の瓦は、初期寺院の瓦の展開とは異なる背景でもって生産が実現されたのであろう。瓦の生成過程には、その瓦が使用される施設の性格や目的の相違による、技術移転過程の違いが現れていると考えられる。そして初期寺院の瓦の展開の大きな起点となったと考えられるのが立願寺廃寺であり、この遺跡の設定には「官」的働きの存在が読み取れる。また、立願寺廃寺の造寺活動は、玉名地域の政治的参画の一つの具現形態でもあったと思われる、このような技術移転の拠点となる寺院の設定が、肥後地域内での造寺活動の展開に大きく寄与したのではないだろうか。

ただ、このような動きのある一方で、興善寺Ⅰa式のように立願寺廃寺からの展開では説明できない瓦も存在する。このことから、肥後地域における初期寺院造営に際しては、各寺院での技術移転の様相が多様であったことが窺える。いずれにせよ、肥後地域における築城・造寺の展開では、朝鮮半島系の技術が大いに利用されたことは明らかである。

おわりに

以上、古代肥後地域の鞠智城、ならびに初期寺院の初期瓦の検討

を通して、初期寺院の展開の様相をみてきた。本文での検討内容をまとめると以下の通りである。

①鞠智城出土軒丸瓦は、大野城出土瓦（〇三三型式）を含む大宰府編年第一段階の瓦の影響を受けて生成された可能性が高い。また、文様とあわせて、製作技法についても大野城を含む大宰府史跡や山陽地方寺院、朝鮮半島で類例が認められるが、肥後地域における造瓦展開とは異なる技術移転過程であった。

②初期寺院出土瓦は、その生成過程の度に新たな文様意匠を導入・創案していた。一方で、製作技法においては、多くの瓦が鞠智城とは異なる瓦当嵌め込み式技法を採用した。但し、その展開においては立願寺廃寺を起点とした展開や、それとは異なる経路での半島由来の技術の導入など、多様な展開過程の存在が想定される。

③瓦の生成過程には、瓦を使用する施設の性格・目的が反映されており、肥後地域での造瓦の展開に寄与したのは、立願寺廃寺を起点とした瓦生産の展開であったと思われる。また、立願寺廃寺造営の実現には、上岩田遺跡との関連が想定され、その背景には「官」的性格をもった影響の一端が読み取れる。

肥後地域では、この後大宰府系瓦の影響があらわれ、瓦当嵌め込み式技法は継続しない。この时期的・地域的に限定されて展開する現象を丁寧を追うことで、大宰府整備前の西海道における、地方統治に関する動態を捉えることが可能となる。本稿の検討は、先行研究に依拠する部分が多いにも関わらず、文様系譜の問題、文様・製作技術の移転元の特定、直接・間接を含めた具体的な技術移転プロセスの復元など、多くの課題を残すこととなった。引き続き、検討していく次第である。

謝辞

本稿は、熊本県教育委員会の平成二十四年度鞠智城跡「特別研究」に伴う、成果報告である。このような発表の機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。本稿を執筆するにあたり、指導教員である岩永省三先生をはじめ、田中良之先生、溝口孝司先生、辻田淳一郎先生、中橋孝博先生、宮本一夫先生、瀬口典子先生、佐藤廉也先生、舟橋京子先生には多くの御指導を賜りました。さらに、研究員・学生諸氏には日頃から多くの御助言・御指導をいただきました。深く感謝申し上げます。また、本稿をなすにあたり、資料の実見に際しては、ご多忙の中、下記の方々・諸機関に便宜を図って頂き、多くの貴重な御教授をいただきました。ここに記して、謝意を表します。(五十音順、敬称略)

木村龍生 清田純一 島津義昭 西江幸子 能登原孝道 日隈寧尚
美濃口紀子 村上晶子 矢野裕介 山崎摂
小郡市埋蔵文化財調査センター 熊本市立熊本博物館 熊本市立熊本市塚
原歴史民俗資料館 熊本県文化財資料室 熊本県立装飾古墳館分館歴史公
園鞠智城・温故創生館 玉名市歴史博物館ころろピア 明言院

注

(一) 渡鹿A遺跡は、従来託麻郡家に比定されている。しかし、明確な遺構は検出されておらず、白鳳期の瓦や鴟尾が出土していることから、渡鹿A遺跡は、寺院跡の可能性も指摘されている(猪熊・大脇・松本一九八〇、鶴嶋一九九一、金田一九九七)。渡鹿A遺跡と、近隣の渡鹿B遺跡(渡鹿廃寺)の性格、ならびに関係についてはさらなる検討を要するが、本稿では、瓦の展開過程を明らかにするという目的のもと、渡鹿A遺跡出土の初期瓦を扱う。

(二) 本稿では、各文様の名称として、既存のものを踏襲する。立願寺廃寺出土資料は、坂田編(一九九四)、それ以外の初期寺院の資料については、鶴嶋(一九九一)に従う。

(三) 瓦当嵌め込み式技法は、稲垣により提示された軒丸瓦の成形技法の一つである(稲垣一九七〇)。肥後では、興善寺廃寺出土軒丸瓦の製作技法の復元の際に、成形技法のパターンが提示されており、野田が提示した「技法I」(野田編一九八〇)が瓦当嵌め込み式技法に該当する。

(四) 実見の結果、瓦当の丸瓦剥離面の瓦当面寄りに、剥離面に沿った横方向の凸線がみられた。これは、丸瓦凹面に施した横ケズリの転写と思われる。このような痕跡は、全ての資料でみられたわけではない。ケズリ面が丸瓦剥離面と接したことにより、転写として観察し得たと考えられ、痕跡の有無はケズリ加工の有無とは断言できない。

(五) 但し、瓦当裏面接合部においては、おおよその資料で共通して、接合ラインに沿った横ナデが認められた。これは、瓦当嵌め込み式技法を採用している資料では、瓦当と丸瓦の接合強度を高めるために、接合部に粘土を補強し接合ラインに沿ってナデを施すためと思われる。よって、この調整技法の統一性は、成形技法が同一であることが一因であろう。

(六) 瓦当嵌め込み式技法を採用している馬騎の内廃寺例を検討した亀田は、この技法は全国的にも稀で、朝鮮半島でも楽浪時代の瓦に主にみられるとしながらも、百済の益山弥勒寺跡の創建時に使用された単弁六葉蓮華文軒丸瓦を挙げている(亀田一九九九)。瓦当嵌め込み式技法の列島への技術移転元の特定については、今後の課題としたい。

参考文献

※報告書は紙面の都合上割愛させていただきます。

網伸也 一九九七 「北白川廃寺の造営過程―北山背古代寺院の考古学的考

察―『古代』九七 早稲田大学考古学会

稲垣晋也 一九七〇 「主として鎧瓦の成形技法について」『飛鳥白鳳の古

瓦』奈良国立博物館

猪熊兼勝・大脇潔・松本修自・津村広志編 一九八〇 『日本古代の鷗尾』

奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館

江本直編 一九八〇 『興善寺Ⅱ―熊本県八代市興善寺町所在興善寺四郎

丸・興善寺志水遺跡の調査―』熊本県教育委員会

小澤毅編 二〇〇五 『古代瓦研究Ⅱ―山田寺式軒瓦の成立と展開―』奈

良文化財研究所

小田富士雄 一九五七 a 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(一)」『九州

考古学』一 九州考古学会

小田富士雄 一九五七 b 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(二)」『九州

考古学』二 九州考古学会

小田富士雄 一九五八 a 「九州に於ける法隆寺系宇瓦の展開」『九州考古

学』三・四 九州考古学会

小田富士雄 一九五八 b 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(三)」『九州

考古学』五・六 九州考古学会

小田富士雄 一九六一 a 「九州における太宰府系古瓦の展開(四)」『九州

考古学』十三 九州考古学会

小田富士雄 一九六一 b 「九州に於ける山田寺系垂木先瓦の発見」『歴史

考古』六

小田富士雄 一九六一 c 「豊前における新羅系古瓦とその意義」『史淵』

八五 九大史学会

小田富士雄 一九六六 a 「九州初期寺院址研究の成果」『古代文化』十七

(三) 古代学協会

小田富士雄 一九六六 b 「百済系単弁軒丸瓦考・その一」『史淵』九五 九

大史学会

小田富士雄 一九七五 「百済系単弁軒丸瓦考・その二」『九州文化史研究

所紀要』二十 九州大学九州文化史研究所

小田富士雄 一九七七 『九州考古学研究 歴史時代篇』 学生社

小田富士雄 一九九〇 「西海道の新羅・百済系古瓦埴」『九州考古学研究

文化交渉篇』 学生社

小田富士雄 二〇一二 「第Ⅴ章 各論 第一節 鞠智城の創建をめぐる検

討」『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八く三二次調査報告―』 熊本県教育委員会

柏原孝俊・山崎頼人編 二〇一一 『上岩田遺跡Ⅲ 上岩田工業団地造成事

業関係埋蔵文化財調査報告書』 小郡市教育委員会

梶原義実 一九九九 「七世紀における造瓦組織の発展」『史林』八二(六)

史学研究会

金田一精 一九九七 「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』十 肥

後考古学会

亀田修一 一九八一 「百済瓦当考」『百済研究』十二 忠南大学校百済研

究所

亀田修一 一九九九 「武蔵野朝鮮系瓦と渡来人」『瓦衣千年―森郁夫先生

還暦記念論文集―』 森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

亀田修一 二〇〇〇 「一 百済軒丸瓦の製作技法」『古代瓦研究Ⅰ―飛鳥

寺の創建から百済大寺の成立まで―』 奈良国立文化財研究所

亀田修一 二〇〇六 「第四章 北部九州の朝鮮系瓦―豊前地域を中心に

―」『日韓古代瓦の研究』 吉川弘文館

北村圭弘 二〇〇四 a 「近江・南滋賀廃寺系列の川原寺式軒丸瓦」『紀要』

十二 滋賀県立安土城考古博物館

- 北村圭弘 二〇〇四b 「縦置型一本作り軒丸瓦製作技法とその地域的変容」『金沢大学考古学紀要』二七 金沢大学文学部考古学講座
- 熊本市文化財調査会編 一九七五 『熊本市文化財調査報告書(Ⅳ・南部地区)』 熊本市文化財調査会
- 九州歴史資料館編 一九八一 『九州古瓦図録』 柏書房
- 栗原和彦 一九九八 「大宰府史跡出土の軒丸瓦―編年試案への模索―」『九州歴史資料館研究論集』二三
- 栗原和彦編 二〇〇〇 『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館
- 国立慶州博物館 二〇〇〇 『新羅瓦埴』
- 坂田邦洋編 一九九四 『玉名郡衙 玉名市歴史資料集成第十二集―市制四十周年記念―』 玉名市・秘書企画課
- 佐川正敏 二〇〇二 「三 瓦の編年と使用堂塔の比定 A 軒丸瓦」『山田寺発掘調査報告 創立五十周年記念 奈良文化財研究所学報(六三)』 奈良文化財研究所
- 佐川正敏・西川雄大 二〇〇五 「一 山田寺の創建軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅱ―山田寺式軒瓦の成立と展開―』 奈良文化財研究所
- 鹿見啓太郎編 一九八一 『備後寺町廃寺―推定三谷寺跡第二次発掘調査概要―』 三次市教育委員会
- 鹿見啓太郎編 一九八二 『備後寺町廃寺―推定三谷寺跡第三次発掘調査概要―』 三次市教育委員会
- 島津義昭 一九八三 「鞠智城についての一考察」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化談叢』上巻 吉川弘文館
- 鈴木久男 一九九〇 「一本造り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』 京都国立博物館
- 妹尾周三 二〇〇五a 「七 安芸の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ―山田寺式軒瓦の成立と展開―』 奈良文化財研究所
- 妹尾周三 二〇〇五b 「一三 備中の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ―山田寺式軒瓦の成立と展開―』 奈良文化財研究所
- 薛貞連 一九七八 「百済蓮華紋瓦当編年に関する研究」『古文化談叢』第三集 九州古文化研究会
- 高谷和生・鶴嶋俊彦編 一九八〇 『鞠智城跡調査報告書―昭和四十二・四十三・四十四・五十四年度調査概報―』 菊鹿町教育委員会
- 鶴嶋俊彦 一九八一 「七二 鞠智城跡」『九州古瓦図録』 九州歴史資料館
- 鶴嶋俊彦 一九九一 「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学―三島格会長古稀記念―』 肥後考古古 肥後考古学会
- 中山圭 二〇〇五 「鞠智城出土の軒丸瓦―朝鮮式山城古瓦の一樣相―」『九州考古学』八〇 九州考古学会
- 奈良国立文化財研究所 一九八三 『南都七大寺出土軒瓦型式一覧(一) 法隆寺』
- 西住欣一郎 一九九九 「発掘から見た鞠智城跡―最近の調査成果から―」『先史学・考古学論究Ⅲ―白木原和美先生古稀記念献呈論文集―』 龍田考古会
- 西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 二〇一二 『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八〇三二次調査報告―』 熊本県教育委員会
- 野田拓治編 一九八〇 『興善寺廃寺Ⅰ―興善寺馬場遺跡発掘報告―』 熊本県教育委員会
- 菱田哲郎 一九八六 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』六九(三二) 史学研究会
- 文化財管理局 一九八二 『皇龍寺 遺蹟發掘調査報告書Ⅰ(圖版編)』

文化財管理局 一九八四 『皇龍寺 遺蹟發掘調査報告書Ⅰ』

松本雅明 一九六五 『陳内廃寺調査報告』 城南町史編集会

宮田浩之 二〇〇五 「九 筑後の山田寺系垂木先瓦・鬼瓦」『古代瓦研究

Ⅱ―山田寺式軒瓦の成立と展開―』奈良文化財研究所

村田多津江・甲元眞之 一九八〇 「肥後の古瓦―技法と系譜―」『平原瓦

窯址』 熊本県教育委員会

毛利光俊彦編 二〇〇二 『山田寺発掘調査報告 創立五十周年記念 奈良

文化財研究所学報(六三)』 奈良文化財研究所

矢野裕介編 二〇〇二 『鞠智城跡―第二十二次調査報告―』 熊本県教

育委員会

挿図出典

第1・7・9図、第一表、筆者作成。第2図、矢野編二〇〇二、熊本市文化財調査会編一九七五、松本一九六五、島津一九八三、坂田編一九九四、江本編一九八〇をもとに、作成。第3図、矢野編二〇〇二、栗原編二〇〇〇、島津一九八三、中山二〇〇五、鹿見編一九八一、一九八二をもとに、作成。第4図、毛利光俊彦編二〇〇二より引用。第5図、奈良国立文化財研究所一九八三より引用。第6図、国立慶州博物館二〇〇〇より引用。第8図、坂田編一九九四より引用。